愛媛大学教育学部紀要　第65巻　「幼児教育特集号」　18～24　2018

幼児におけるテレビ及びDVDの視聴時間と視聴環境の実態調査

（保健体育講座）上田　敏子

A survey on TV/DVD viewing time and environment in preschool children

Toshiko UEDA

（平成３０年９月２８日受理）

抄録：本研究は、幼児のテレビ及びDVDの視聴時間、視聴環境および視聴内容を調査することを目的とした。A大学教育学部附属幼稚園園児（年少～年長：男児68名、女児71名）の保護者139名を対象に、子どもの視聴状況について尋ねた。調査内容は、平日および休日のテレビ及びDVDの視聴時間、随伴視聴の状況、テレビ・DVDの視聴内容であった。その結果、(1) 平日に1日2時間以上視聴している児は、男女で約3割、休日では男児で約3割、女児で約4割が該当する (2) 視聴環境については、女児において祖父母と一緒に視聴している割合が多い (3) 男児は女児と比べ、子どもたちだけで視聴する傾向があり、女児は大人と一緒に視聴していることが示された。

キーワード：幼児（preschool children）、　テレビ（television）、　視聴環境（viewing environment）

１．はじめに

子どもを取り巻くメディア環境はテレビやゲーム機の台頭により大きく変化してきた。幼児を対象とした縦断的調査[1]によると、テレビ・ビデオやテレビゲームで遊ぶ割合は、10年前（平成12年）と比べ増加しており、遊びの内容が明らかに変化してきていることが報告されている。また2003年より実施されたNHK放送文化研究所のメディア環境の調査[2]では、0歳でテレビを所有している家庭は99.8%、ビデオのある家庭は98%前後、パソコンの所有は8割弱、ゲーム機の所有は5割弱であることが報告されている。また、近年は、録画番組、テレビゲーム、携帯ゲーム、インターネットといったテレビ以外のメディア利用が急速に進んできていることも報告されている[3]。

こうした子どもを取り巻くメディア環境の変化は、遊びの変容に留まらず、子どもの生活に様々な影響を及ぼすことが報告されている。その一つに長時間視聴がある。栗谷ら[4]は、テレビの視聴時間が短い群は長時間の群と比べ、好ましい生活習慣であることを報告している。また服部らは[5]、テレビの視聴時間の長い幼児は就寝時刻が遅く短時間睡眠であることや朝食摂取が十分でないことを報告し、生活習慣への影響を指摘している。さらに、上野ら[6]は食事への影響に着目し、テレビ放映のある環境において幼児は食事自体に注視せず、母子のやりとりが少ないといった違いがみられるという。

こうしたテレビの視聴は、生活習慣への影響のみならず、発育への影響も報告されている。日本小児科医会調査委員会による報告[7]によると、1～3歳未満において、乳児の時に3

時間以上テレビ・ビデオ視聴していた子どもは、2 時間以下の子どもと比べ「話しかけても目で見て応じない」、「ブロックなどを積んで遊ばない」といった特徴が多くみられるという。また同委員会[8]の報告によれば、乳幼児期の視聴時間が3 時間以上の群では、コミュニケーションや言葉の遅れなどが多く、情緒不安定な面が見られると報告している。さらに、土谷[9]は乳幼児初期から長時間テレビ・ビデオ接触した3歳児の特徴として、情緒や運動性、視知覚、コミュニケーション上に心配な行動が観察されたことを報告している。このように長時間視聴は、生活習慣や認知面へ影響することが数多く報告されている。こうしたなか、日本小児科医会は「子どもとメディアの問題に対する提言」[10]を発表している。それによると、①2 歳までのテレビ・ビデオ視聴を控えること、②授乳中、食事中のテレビ・ビデオの視聴は止めること、③すべてのメディアへの接触時間を制限することが重要とし、1日2時間までを目安とすること。テレビゲームは1日30分までを目安とすること、④子ども部屋にはテレビ、ビデオ、パーソナルコンピューターを置かないようにする、⑤保護者と子どもでメディアを上手に利用するルールをつくることが提示されている。このように、子どもの心身の健康を守る上でもメディアの利用の仕方について、子どもに関係するすべての人々が熟慮することが必要といえる。

ところで、こうしたメディアを誰と視聴しているかという視聴環境も重要な視点といえる。ベネッセ教育総合研究所の報告[11]では、テレビ・ビデオ・DVD の視聴の様子について調査を行っている。それによると、「視聴しているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりすること」や、「見終わった後、家族と内容について、話をすること」について、6~7 割が「よくある・ときどきある」と回答し、親子が一緒に楽しんで視聴している様子が報告されている。このように、テレビ等は、親子のコミュニケーション手段の一つとして活用されている面があることが分かる。こうした随伴視聴について、加納ら[12]の報告によると、児のテレビ・ビデオの視聴中に家族がよく関わっている割合は、3歳6か月健診時は1歳6か月健診時と比べ有意に減少していると報告されており、成長するにつれ視聴スタイルに変化が生じていることが分かる。

一方、上述の土谷の報告[9]によれば、乳幼児初期から長時間テレビ・ビデオ接触していた3歳児の視聴スタイルの特徴として、①1歳前からの視聴開始、②1回に長時間視聴する、③繰り返し（巻き戻し）視聴が多い、④一人で視聴（大人が声をかけない）、⑤外遊びをほとんどしないという特徴が挙げられていた。このうち「一人で視聴する」という視聴環境が挙げられていることからも、「一人視聴」は留意しなければならない視聴スタイルといえる。こうした視聴環境について、田澤[13]が指摘するように、メディアに囲まれた環境は子どもの注意がメディアに向けられるだけでなく、大人との会話自体も大幅に減り、言葉の発達に影響することが危惧されている。このように、視聴環境についていくつかの報告があるが、長時間視聴と視聴環境の関連については十分な調査が行われていない。

そこで、本研究は幼児の保護者を対象にテレビや DVD の視聴時間、視聴環境、視聴内容について調査し、その実態を把握することを目的とする。

２．方法

（1）調査時期および対象

2014 年 10 月、四国地区の A 大学教育学部附属幼稚園園児（男児 68 名、女児 71 名）の保護者 139 名を対象に記名式の質問紙調査を実施した。対象の園児は、年少 43 名（男児 23 名、女児 20 名）、年中 48 名（男児 25 名、女児 23 名）、年長 48 名（男児 20 名、女児 28 名）である。調査票は宿題調査とし、学級担任から保護者へ配布した。回収は各学級担任により行い、養護教諭が全学年分の調査票を回収した。回収率は 100%であった。

（2）倫理的配慮

本調査は、A 大学および A 大学教育学部の附属 5 校園の養護教諭からなる養護教諭部会の研究の一環として、「家庭での遊びについて」実態調査を行ったものである。調査票の所要時間は 5 分程度である。養護教諭部会では、「他者とのかかわりの中で、自分らしく生き抜くことができる子どもを育てる」を研究主題として取り組んでいる。本研究では園児の家庭での遊びの現状を把握し、その結果を個別相談や実際の保育に生かすため、記名式により実施することを保護者に説明し、保護者からの同意を得た上で実施した。また、調査の実施にあたっては、調査の趣旨、データの分析において個人が特定

されることはないこと、得られたデータは研究以外には用いないこと、回答への不参加の自由が保障されていること、不参加の場合であっても不利益を被ることがないことを口頭および文章にて説明を行い、同意を得た上で実施した。

（3）調査内容

①テレビ映像等の視聴時間

子どもが視聴しているテレビ及び DVD の視聴時間について、「1 時間未満」、「1～2 時間未満」、「2～3 時間未満」、「3～4 時間未満」、「4～5 時間未満」の選択肢より回答を求めた。

②テレビ映像等の随伴視聴の状況

テレビ及び DVD を誰と見ていることが多いかについて回答を求めた。選択肢は「1 人で見ていることが多い」、「親と見ていることが多い」、「祖父母と見ていることが多い」、「子ども達だけで見ていることが多い」、「その他」とした。

③テレビ及び DVD の視聴内容

子どもがよく視聴しているテレビ及び DVD の番組内容について自由記述により回答を求めた。なお、回答は複数回答とした。

（4）分析方法

テレビ映像等の視聴時間および視聴環境について、男女別に集計し χ^2 検定および残差分析を用いて検討した。本研究では『メディアの問題に対する提言 [10]』を参考に、2 時間未満をテレビ映像等短時間群、2 時間以上をテレビ映像等長時間群とする 2 群に分けた。テレビ映像等視聴時間の 2 群と視聴環境、性別について χ^2 検定を行った。テレビ映像等の視聴内容については単純集計を行った。統計パッケージは、IBM SPSS 20.0 J for Windows を用いた．有意水準はすべて 5%とした。

３．結果および考察

（1）テレビ映像等の視聴状況

①テレビ映像等の視聴時間

テレビ・DVD の視聴時間について、平日および休日ごとに集計した（表 1・表 2、図 1・2）。その結果、男児の平日のテレビ映像等の視聴時間は「1 時間未満」が最も多く、42.6%であった。「1～2 時間未満」は 32.4%、「2～3 時間未満」が 20.6%であった。女児においても「1 時間未満」が最も多く、36.6%であった。「1～2 時間未満」は 35.2%、「2～3 時間未満」が 21.1%であった。男女間で有意差はみられなかった。星 [14] の報告では 2～6 歳のテレビ視聴時間は、週平均 1 日あたり 1 時間 40 分とされ、栗谷ら [4] においても 1 ～2 時間が最も多いことが報告されている。本研究では全体の 7 割が 2 時間未満であり、先行研究と同様の結果であった。

表 1 平日のテレビ映像等の視聴時間

	n	1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3～4時間未満	4～5時間未満	無回答
男児	68	29(42.6)	22(32.4)	14(20.6)	1(1.5)	1(1.5)	1(1.5)
女児	71	26(36.6)	25(35.2)	15(21.1)	2(2.8)	3(4.2)	0

n(%)

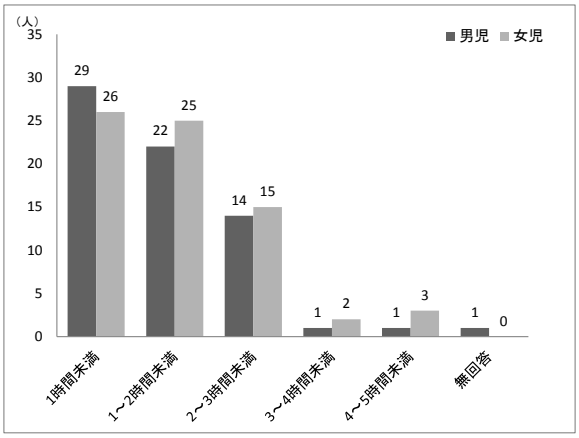

図 1 平日のテレビ映像等の視聴時間

休日について、男児は「1～2 時間未満」が最も多く、52.9%であった。「1 時間未満」は 19.1%、「2～3 時間未満」が 13.2%であった。「3～4 時間未満」が 8.8%、「4～5 時間未満」が 2.9%であった。女児においても「1～2 時間未満」が最も多く、36.6%であった。「1 時間未満」および「2～3 時間未満」が 23.9%であった。「3～4 時間未満」が 8.5%、「4～5 時間未満」が 5.6%であった。男女間で有意差はみられなかった。先行研究 [15] において、休日の視聴時間は 2 時間未満であることが示されており、先行研究と同様の結果を示したと言える。

以上の結果から、日本小児科医会 [10] の提唱するメディアの接触時間の目安（1 日 2 時間）でみてみると、平日に 1 日 2 時間以上視聴している児は男女で約 3 割、休日では男児で約 3 割、女児で約 4 割にのぼることが明らかとなった。

表 2 休日のテレビ映像等の視聴時間

	n	1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3～4時間未満	4～5時間未満	無回答
男児	68	13(19.1)	36(52.9)	9(13.2)	6(8.8)	2(2.9)	2(2.9)
女児	71	17(23.9)	26(36.6)	17(23.9)	6(8.5)	4(5.6)	1(1.4)

n(%)

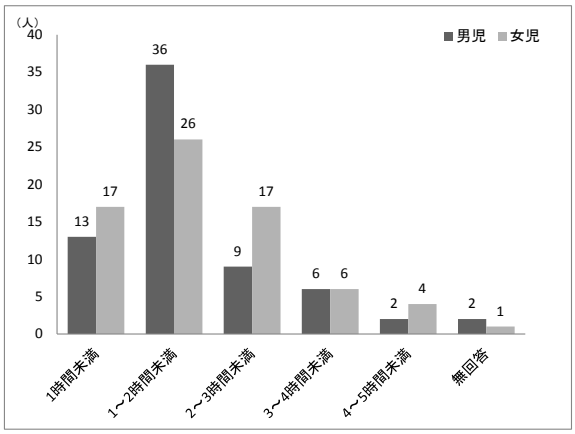

図 2 休日のテレビ映像等の視聴時間

②テレビ映像等の視聴環境

テレビ及び DVD の視聴環境について、それらを誰と見ていることが多いか尋ねた（表 3）。その結果、男児では「子ども達だけで見ていることが多い」が最も多く、55.2%であった。次いで「親と見ていることが多い」22.4%、「一人で見ていることが多い」17.9%であった。女児においても、「子ども達だけで見ていることが多い」が最も多く、38.0%であった。次いで「親と見ていることが多い」36.6%、「一人で見ていることが多い」12.7%、「祖父母と見ていることが多い」7.0%であった。その他の内容としては、「親と見ていることと子ども達だけで見ていることが半々」、「アニメは子どもだけで見ることが多く、その他は家族で見る」、「子ども達だけで見ているが、同じ部屋にいる親が家事をしながらチラチラ見る」といった内容が挙げられた。また、男女間で有意差が示され、女児において祖父母と見ている割合が高かった。

表 3 男女別にみた視聴環境

	n	一人	親	祖父母	子ども達だけ	その他
男児	67	12(17.9)	15(22.4)	0	37(55.2)	3(4.5)
女児	71	9(12.7)	26(36.6)	5(7.0)	27(38)	4(5.6)

n(%)

次に、視聴環境について、「子ども達だけで見ている」群（「一人」、「子どもたちだけ」）および「大人と見ている群」（「親」、「祖父母」）の 2 群に分類し、性別に検討した（表 4）。その結果、男児は女児と比べ、子どもたちだけで視聴し、女児は大人と一緒に視聴していることが明らかとなった（χ^2（1）＝7.48, p=0.005）。視聴環境に関する中井ら[14]の報告がある。それによると、2 歳以降において、大人と一緒のテレビ接触時間は、男児より女児で長い傾向にあることが示されている。本研究においても女児において同様の傾向がみられたと推察される。

表 4　性別の視聴環境

	n	子ども達だけで見ている群	大人と見ている群
男児	64	49(76.6)	15(23.4)
女児	67	36(53.7)	31(46.3)

n(%)

③テレビ映像等の視聴時間と視聴環境

平日および休日の視聴時間と随伴視聴の状況（子ども達だけで見ている群・大人と見ている群）について単純集計を行った（表 5・表 6）。その結果、平日では両群において「1 時間未満」が最も多く、「子ども達だけ」36.5%、「大人と見ている」47.8%であった。また、平日では視聴時間が 3 時間以上の場合、「子ども達だけ」で視聴していることが示された（3～4 時間未満 2.4%、4～5 時間未満 4.7%）。休日では、両群において「1～2 時間未満」が最も多く、「子ども達だけ」45.9%、「大人と見ている」45.7%であった。

表 5 平日の視聴時間と視聴環境

	n	1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3～4時間未満	4～5時間未満	無回答
子ども達だけで見ている群	85	31(36.5)	28(32.9)	19(22.4)	2(2.4)	4(4.7)	1(1.2)
大人と見ている群	46	22(47.8)	16(34.8)	8(17.4)	0	0	0

n(%)

表 6 休日の視聴時間と視聴環境

	n	1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3～4時間未満	4～5時間未満	無回答
子ども達だけで見ている群	85	14(16.5)	39(45.9)	15(17.6)	9(10.6)	5(5.9)	3(3.5)
大人と見ている群	46	13(28.3)	21(45.7)	9(19.6)	2(4.3)	1(2.2)	0

n(%)

次に、平日および休日の視聴時間の 2 群と随伴視聴について検討した（表 7・表 8）。その結果、有意な関連はみられず（平日：χ^2（1）＝2.70, p=0.074、休日：χ^2（1）＝1.16, p=0.189）、本研究では視聴時間別の関連は見出されなかった。若松ら[16]は 1 歳 6 か月健診時に母親への調査を報告している。それによると、テレビがついている時間の長さは、周囲の家事や育児を手伝ってくれるサポートの有無に関連すること、またテ

レビ・ビデオを視聴させる理由として「家事をするため」が最も多いことを報告している。つまり、子どもがテレビ等を視聴している時間は、親にとっては家事をする時間に充てられ、子ども達だけでテレビ等を視聴する環境となっているといえる。同様に、田澤[12]が指摘するように、大人たちは子どもにテレビやゲームを手渡しておくことで、「子守り」「子育て」の手間を省く手軽な道具として採用し、その結果子どもたちは映像メディア漬けになっていると述べられている。本研究では長時間視聴の場合の視聴スタイルの特徴は見いだされなかったが、2 時間以上視聴している場合、子ども達だけで視聴している割合が多く、視聴中の大人との関わりが少なくなっていることが予想される。この点については、今後も引き続き調査を行い、真相を究明していく必要がある。

表 7 平日の視聴時間（2 群）と視聴環境

	n	2時間未満	2時間以上
子ども達だけで見ている群	85	59(69.4)	26(30.6)
大人と見ている群	46	38(82.6)	8(17.4)

n(%)

表 8 休日の視聴時間（2 群）と視聴環境

	n	2時間未満	2時間以上
子ども達だけで見ている群	82	53(64.6)	29(35.4)
大人と見ている群	46	34(73.9)	12(26.1)

n(%)

（2）テレビ映像等の視聴内容

視聴しているテレビ番組および DVD について、学年別による記述数を集計した（表 9～表 12）。テレビ番組については、アニメ番組、NHK 教育番組、ドラマ（子ども向け）およびその他の 4 種類に分類して表示した。

その結果、アニメでは各学年において「ドラえもん」、「妖怪ウォッチ」が上位を占めた。年少では「アンパンマン」、年中および年長では「プリキュア」が上位に挙がっていた。NHK 教育番組では、番組名が示されていないものもあったが、年少では「おかあさんといっしょ」が最も多く、「はなかっぱ」、「いないいないばあっ！」、「みいつけた！」が多くみられた。年中では「おさるのジョージ」、「お母さんといっしょ」が多かった。年長では「はなかっぱ」、「おじゃる丸」が多かった。ドラマ（子ども向け）では、各学年において、「列車戦隊トッキュウジャー」が含まれていた。また、年少および年長に「地獄先生ぬ～べ～」、年少および年中に「仮面ライダー」が含まれていた。

表 9　年少がよく視聴している TV 番組

アニメ		NHK教育番組		ドラマ	
ドラえもん	11	おかあさんといっしょ	13	列車戦隊トッキュウジャー	6
妖怪ウォッチ	9	NHK教育番組	9	仮面ライダー	3
アンパンマン	7	おさるのジョージ	8	ドラマ（地獄先生ぬ～べ～）	1
プリキュア	6	はなかっぱ	6	計	10
ディズニー作品	3	いないいないばあっ！	5		
ポケモン	2	みいつけた！	5		
しまじろう	2	ピタゴラスイッチ	3	その他	
サザエさん	2	ひつじのショーン	3	地球ドラマチック	1
クレヨンしんちゃん	2	きかんしゃトーマス	3	オーケストラ番組	1
ちびまる子ちゃん	1	日本語・英語であそぼ	2	おはよう日本（ニュース）	1
名探偵コナン	1	デザイン・あ	2	志村動物園	1
	1	コズミックフロント	1	フィニアスとファーブ	1
		フックブックロー	1	計	5
		プレキソ	1		
		クックルン	1		
		おじゃる丸	1		
計	47	計	64		

表 10　年中がよく視聴している TV 番組

アニメ		NHK教育番組		ドラマ	
ドラえもん	22	NHK教育番組	10	仮面ライダー	8
妖怪ウォッチ	17	おさるのジョージ	10	列車戦隊トッキュウジャー	5
ちびまる子ちゃん	9	おかあさんといっしょ	7	ウルトラマン	1
プリキュア	8	忍たま乱太郎	3	計	14
サザエさん	8	おじゃる丸	3		
クレヨンしんちゃん	7	ひつじのショーン	2		
アンパンマン	5	はなかっぱ	2	その他	
ポケモン	4	天才テレビくん	2	親の見ている番組を見る	2
しまじろう	4	みいつけた！	1	志村動物園	1
名探偵コナン	2	クックルン	1	クイズ番組	1
ワンピース	2	日本語・英語であそぼ	1	ダーウィンがきた	1
ドラゴンボール	2	考えるカラス	1	大河ドラマ	1
ディズニー作品	1	ひらめき工房	1	計	6
カートゥーンネットワーク	1	できたできたできた	1		
日本昔ばなし	1	キミなら何つくる	1		
トムとジェリー	1				
アイカツフレンズ！	1				
ジュエルペット	1				
計	96	計	46		

表 11　年長がよく視聴している TV 番組

アニメ		NHK教育番組		ドラマ	
妖怪ウォッチ	25	NHK教育番組	11	列車戦隊トッキュウジャー	5
ドラえもん	10	はなかっぱ	7	ドラマ（地獄先生ぬ～べ～）	3
プリキュア	9	おじゃる丸	4	計	8
ポケモン	8	おかあさんといっしょ	3		
ディズニー作品	5	天才テレビくん	3	その他	
サザエさん	4	忍たま乱太郎	2	ダーウィンがきた	7
名探偵コナン	4	いないいないばあ	1	世界の果てまでイッテQ	5
ちびまる子ちゃん	3	みいつけた！	1	おはよう日本（ニュース）	3
クレヨンしんちゃん	2	おさるのジョージ	1	大河ドラマ	2
アイカツフレンズ！	2			逃走中	2
アンパンマン	1			親の見ている番組を見る	2
カートゥーンネットワーク	1			朝ドラ	1
マジック快斗	1			鉄腕DASH	1
うちの三姉妹	1			よしもと新喜劇	1
たまごっち	1			クラシック番組	1
計	77	計	33	計	25

DVD については、すべての学年において「ディズニー作品」が最も多かった。また、上位には「ジブリ作品」、「ドラえもん」、「アンパンマン」が上位に挙がっていた。

星[14] の年齢別の番組調査がある。それによると、2~3 歳では NHK 教育テレビや民放では「ドラえもん」、「クレヨンしんちゃん」、「サザエさん」が多くみられている。4 歳以上になると、民放のアニメや「仮面ライダーゴースト」のようなヒーロー・戦隊シリーズがよく見られるとの報告がある。本研究においても、年少よりも年中、年長において NHK 教育番組よりもドラマやその他に分類されている番組を見ている傾向が示された。

表 12　各学年でよく視聴している DVD の内容

年少		年中		年長	
ディズニー作品	33	ディズニー作品	27	ディズニー作品	12
ジブリ作品	6	ジブリ作品	7	ドラえもん	6
アンパンマン	6	しまじろう	6	ジブリ作品	5
しまじろう	6	ドラえもん	4	その他アニメ	4
トムとジェリー	3	アンパンマン	3	トムとジェリー	3
ドラえもん	2	ポケモン	2	しまじろう	3
妖怪ウォッチ	2	妖怪ウォッチ	2	妖怪ウォッチ	2
ポケモン	1	日本昔話	2	日本昔話	2
日本昔話	1	トムとジェリー	2	ウルトラマン	2
マーシャとくま	1	トミカ	2	ポケモン	1
英語DVD	1	クレヨンしんちゃん	2	サザエさん	1
列車戦隊トッキュウジャー	1	怪盗グルーの月泥棒	2	仮面ライダー	1
		マーシャとくま	1	英語DVD	1
		ワンピース	1		
		チャギントン	1		
		マリオ	1		
		レゴ	1		
		プリキュア	1		
計	63	計	67	計	43

（3）研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は一幼稚園の園児の保護者による結果報告であり、結果の解釈には限界がある。今後は、横断的調査を実施し、視聴時間、視聴環境等の関連について分析を行う必要がある。

4．まとめ

本研究では、幼児におけるテレビ及び DVD の視聴時間、視聴環境等ににについて、A 大学教育学部附属幼稚園園児の保護者 139 名に対して調査した。その結果、(1) 日本小児医会の提唱するメディアの接触時間の目安（1 日 2 時間）で分類すると、平日に 1 日 2 時間以上視聴している児は男女で約 3 割、休日では男児で約 3 割、女児で約 4 割が該当する (2) 視聴環境については、女児において祖父母と一緒に視聴している割合が多い (3) 男児は女児と比べ、子どもたちだけで視聴し、女児は大人と一緒に視聴していることが示された。本研究は限られた対象ではあるが、幼児のテレビ映像等の視聴時間および視聴環境の実態が明らかとなった。

謝辞

本研究の調査にご協力いただいた A 大学教育学部附属幼稚園園長ならびに養護教諭、担任の先生方に心より感謝申し上げます。

付記

本研究の一部は、「幼児のテレビ映像等視聴時間別にみた身体活動時間　―教育学部附属幼稚園を対象として―」(教育保健研究 19 号、 pp79-85、 2016」において発表されたものである。

参考文献

1） 衞藤隆：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金　生育疾患克服等次世代育成基盤研究事業　幼児健康度に関する継続的比較研究. 平成 22 年度総括・分担研究報告：12-13、2011

2） NHK 放送文化研究所：0–5 歳の子どもとテレビ ～“子どもに良い放送”プロジェクト調査　中間報告～. Available at：https://www.nhk.or.jp/bunken/research/category/bangumi_kodomo/pdf/kodomo101207.pdf Accessed November 27、 2015

3） 中野佐知子:幼児のテレビ視聴時間の減少とその背景：～幼児生活時間調査・2013 の結果から～. 放送研究と調査 63（11）：48-63、2013

4） 栗谷とし子・吉田由美:幼児のテレビ・ビデオ視聴時間、ゲーム時間と生活実態との関連. 小児保健研究 67（1）：72-80、2008

5） 服部伸一・足立正・嶋崎博嗣ほか：テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響. 小児保健研究 63（5）：516-523、2004

6） 上野有理・竹下秀子：テレビを視聴しながらの食事が幼児の食行動に与える影響. 小児保健研究 76(6): 625-629、2017

7） 伊藤幸生・秋山千枝子・石黒成人ほか（日本小児医会調査委員会）:「子どもとメディア」に関する意識調査 0 歳から 2 歳児のメディア環境の現状について―テレビやビデオ視聴 2 時間の影響―. 日本小児科医会会報 30 : 120-125、2005

8） 澤井遵・浅野純一・藤本保ほか（日本小児科医会調査委員会）:「子どもとメディア」に関する意識調査 ―乳幼児期のテレビ・ビデオ長時間視聴が子どもの発達、行動におよぼす影響―. 日本小児科医会会報 30 : 113-119、2005

9） 土谷みち子 : 子どもとメディア ： 乳児期早期からのテレビ・ビデオ接触の問題点と臨床的保育活動の有効性. 国立女性教育会館研究紀要 5 : 35-46、2001

１０） 社団法人日本小児科医会 :「子どもとメディア」の問題に対する提言.「子どもとメディア」対策委員会、2004 Available at : http://www.jpa-web.org/about/organization_chart/cm_committee.html Accessed September 9、 2018

１１） ベネッセ教育総合研究所 : 第 3 回 幼児の生活アンケート・国内調査報告書、2005 Available at : https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3287 Accessed September 15、 2018

１２） 加納亜紀・高橋香代・片岡直樹・清野佳紀 : 幼児期のテレビ・ビデオ視聴と養育環境の関連. 小児保健研究 68（5）： 549-558、 2009

１３） 田澤雄作 : メディアにむしばまれる子どもたち 小児科医からのメッセージ. 教文館、東京、2015

１４） 星暁子 : 幼児のテレビ視聴と録画番組・DVD の利用状況 ：2016 年 6 月「幼児視聴率調査」から. 放送研究と調査 66（11）: 54-67、2016

１５） 中井俊朗・西村規子・菅原ますみ : 乳幼児期のテレビ接触を規定する要因 ～“子どもに良い放送”プロジェクト・中間総括報告書から～. NHK 放送文化研究所年報 : 295-325、2010

１６） 若松美貴代・武井修治 : 乳幼児の長時間視聴に関連した要因の探索 ： 育児環境と母親の意識に焦点をあてて. 小児保健研究（2）: 261-266、2013